

保育者・教育者養成課程における 初年次教育としての「フィールドワーク研究」実践の効果と課題

水野友有¹⁾・八桁 健¹⁾・別府悦子¹⁾

Effects and Problems of Field Works as First-Year Experience in Childcare Worker and Teacher Training Course

Yuu MIZUNO, Ken YAGETAE, and Etsuko BEPPU

保育者・教育者養成校における初年次教育の重要性が指摘されており、大学・学部の特徴や4年間のカリキュラムを見据えた様々な初年次教育が実践されてきた。そこで本実践では、保育者・教育者養成課程における初年次教育として、大学2年生を対象に「フィールドワークによる地域子ども教育学研究（以下、フィールドワーク研究）」を実践した。地域の子どもたちをとりまく環境について考えることを目的とし、テーマ選定から発表・報告まで、一連の研究プロセスを一人で実践する。こうした実践を通して、大学生として生きる力を支え、保育や教育の専門性を身につける素地づくりをしながら、「知識及び技術」「思考力、判断力、表現力」「学びに向かう力、人間性」を育成することをめざした。実践の後に振り返りとして調査結果をもとに、「フィールドワーク研究」実践の意義や効果、今後の課題について考察した。

キーワード：保育者・教育者養成、初年次教育、フィールドワーク、保育・教育の専門性

1. 問題と目的

大学への進学率向上のもとで、ユニバーサル化の傾向があるが、一方で学力や学習への動機づけに課題があり、中退などに至る学生の問題が指摘される。それを受けて、大学入学後にスムーズな移行を図る一助として、「初年次教育（First-Year Experience）」の位置づけが全国の大学・短期大学など（以下大学と記す）で推進されてきた。初年次教育とは、導入教育とも呼ばれ、主に高校を卒業して大学に入学してきた学生、すなわち大学新生に対して行われ、その目的は、個人差を抱える学生たちの基礎学力や学習意欲、社会的スキルに対して速やかに大学生活に移行させることだといえる（2006, 藤田）。なかにはリメディアル教育（補習教育）をおこなっているところもある。リメディアル教育とは、本来は大学入学前に習得しているはずの高等学校等課程の学習内容について入学時に補習するものである。

しかし、大学や学部の特徴から、新入生に求められる基礎学力や技能、素地は異なると考えられるため、単なる高校の補習教育だけでは、その後の大学生活や授業への適応やモチベーションを考えた際に問題を抱えるケースが出てくる可能性も考えられる。

ことに、大学卒業後に即対人援助を行う保育者・教育者養成校においては、こうした初年次教育の重要性が指摘されており（菅井, 2012）、4年間のカリキュラムを見据えた様々な初年次教育が実践されてきた（服部, 2013・2015）。その中では、幼稚園や保育所、小学校への訪問や見学を実施するところが多く、大学敷地内で野菜を育てるなどの園芸活動、大学外のキャンプ場での飯盒炊爨活動など体験型の実践（菅井, 2012）もある。これらは、保育・教育実習等の事前学習的な位置づけの実践や、仲間づくりを目的にしているとも言え、新入生対象に、半期や1年間で終了しているプログラムがほとんどのようである。しかし、保育や教育の専門性を身につけ

1) 教育学部子ども教育学科

るための素地づくりは、その後も継続することが望ましいとの指摘もある。

一方、「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「幼保連携認定こども園教育・保育要領」の改訂に伴い、保育者・教育者に求められる力が明確化された（文部科学省，2017）。子どもたちの生きる力の基礎を育成するため、「育みたい資質・能力」については、次のように記述されている。

- (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気づいたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (2) 気づいたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

こうした子どもたちの資質・能力を育成することの重要性が提起され、それを踏まえた保育者、教育者の素地を、大学教育の中で育成することが明確化されてきている。

こうした保育者・教育者養成の動向や求められる課題をふまえた初年次教育がますます求められていると言える。そこで、本実践では、こうした課題に鑑み行なった、保育者・教育者養成課程における初年次教育の取り組みを報告する。具体的には、大学1年次で実践した「テーマ研究」と称した導入教育に引き続き、初年次教育の一環として2年次に「フィールドワークによる地域子ども教育学研究（以下、フィールドワーク研究）」を実践した。これは、地域の子どもたちをとりまく環境について考えることを目的とし、テーマ選定から発表・報告まで一連の研究プロセスを一人で実践することを目的に実施するものである。なお、本学・本学科では、2012年から2年生対象にフィールドワークによる研究をおこなってきたが（竹ノ下ら，2013）、6年間の課題を受けて改訂し、2018年に新しいプログラムとして実践した。こうした実践を通して、大学生として生きる力を支え、保育や教育の専門性を身につける素地づくりをしながら、「知識及び技術」「思考力、判断力、表現力」「学びに向かう力、人間性」を育成することをめざしている。

そこで、本報告では、この「フィールドワーク研究」実践の意義や実態を紹介し、その効果を検討することを目的とする。

2. 方法

(1) 対象者

中部学院大学教育学部子ども教育学科保育・幼児教育コースの2年生で、「子ども教育学基礎演習Ⅱ A・B」の受講生32名（男性：6名、女性：26名）

(2) 「フィールドワーク研究」実践期間

フィールドワーク研究は平成30年4月～1月に、「子ども教育学基礎演習Ⅱ A（前期）、夏季休暇、「子ども教育学基礎演習Ⅱ B（後期）」を通して実施した。

(3) 「フィールドワーク研究」実践内容

表1のような実践の内容とプロセスで実施した。なお前期中の2週間は、保育実習Ⅰ B（施設）があったため、活動が中断している。

(4) 調査方法と内容

フィールドワーク研究の振り返りとして、研究期間中に2回にわたり質問紙による調査をおこなった。調査1は、前期の中間報告後に、調査2は、ポスター発表会や成果報告書を含む成果報告後に実施した。それぞれの調査項目は表2の通りである。

表1 「フィールドワーク研究」実践のプロセス

	活動内容
前期	① 主テーマの決定
	② 副テーマの決定
	③ フィールドワーク研究計画
	④ 中間報告書とプレゼン作成
	⑤ フィールドワーク研究中間報告 [調査1]
夏季休暇 後期	⑥ フィールドワークの実践
	⑦ データの分析
	⑧ ゼミ内でのプログレスレポート
	⑨ 研究のまとめ
	⑩ 研究サマリーとポスターの作成
	⑪ ポスター発表会
	⑫ 他のポスター閲覧と評価・自己評価
	⑬ フィールドワーク成果報告書作成 [調査2]

表2 「フィールドワーク研究」実践に関する調査項目（中間：中間報告後、成果：成果報告後）

項目	中間	成果	設問
テーマに関する項目			
テーマの確定	1		自分のフィールドワークのテーマは確定した
独自性・創造性	2	2	自分のフィールドワーク研究のテーマは面白い/面白かった
必要性・重要性	3	3	自分のフィールドワーク研究は意義がある/あった
事前学習・計画に関する項目			
事前学習の有無	5	5	フィールドワークを進めるにあたり、事前学習をおこなった
図書館の利用	6	6	フィールドワークを進めるにあたり、図書館を利用した
文献の探し方	7	7	図書館にない本や文献の探し方を知っている/オンラインデータベースの使用
方法に関する項目			
		4	自分のフィールドワークの方法は適切な方法である/だった
仮説（予測・推論）	9	12	自分のフィールドワーク研究の結果に対して仮説を持っている/持って臨んだ
計画	8	10	自分のフィールドワークは現在の計画通りに進む/進んだ
方法の選択	4	4	自分のフィールドワーク研究の方法は、適切な方法である/だった
フィールドワークの有無		8	学外の現場（フィールド）に実際に出かけた
インタビュー・観察の有無		9	大学生以外の誰かにインタビューしたり、何かを観察したりした
集計・分析		13	データをどのように集計・分析するか、自分なりに考えた
研究へのモチベーションに関する項目			
モチベーション		1	フィールドワーク研究に関する一連の作業に積極的に取り組むことができた
	10	25	フィールドワーク研究を進めることが楽しみである/楽しかった
報告後のモチベーション	20	35	報告会に参加し、今後のフィールドワーク研究/卒業研究への意欲が高まった
	21	36	報告会に参加し、研究で新しく取り組みたいことができた
報告会に関する項目			
事前準備	11	14	報告会のために、しっかり準備した
	12	15	報告会のための課題（スライド作成など）に適切に取り組んだ
	15	26	報告会までに、フィールドワーク研究に関して他の人に相談した
発表の振り返り	13	16	報告会の発表はうまくいった
	14	17	報告会の自分の発表には改善する部分があった
	16	18	報告会に参加してよかった
目的や課題の明確化	17	19	報告会に参加して、自分の研究目的や課題が明確になった
他者との議論	18	30	報告会后に、フィールドワーク研究に関して他の人に相談した
計画の再考	19	11	報告会に参加して、自分の研究計画を考え直した
研究全体の振り返りに関する項目			
テーマ選定		20	テーマの選定が難しかった
事前準備		21	事前の準備作業が難しかった
フィールドワーク		22	現地でのフィールドワークが難しかった
時間調整・配分		32	他の授業や課題を行うための時間調整が難しかった
集計・分析		23	結果の集計や分析作業が難しかった
他者との議論		30	ゼミ内での議論に積極的に参加した
成果のまとめ・報告		24	成果のまとめ作業や報告が難しかった
研究後の意識に関する項目			
社会や地域		27	地域の様々な事象について考えることができた
子どもや子育て		28	子どもに関する事象や問題について考えることができた
新たな発見・発想		29	新たな発見や発想、疑問が出てくることがあった
他者への興味・関心		31	他の人の研究に興味や関心をもてた
自己理解		33	自分の得意なことが明確になった
		34	自分の苦手なことが明確になった
次の課題への意欲		35	今後の卒業研究への意欲が高まった
		36	新しく取り組みたいことができた
全体に関する自由記述	22	37	

(5) 集計と分析

調査1と調査2の回答を集計し、質問項目のうち、質問内容が対応している20項目について、調査1(中間)と調査2(成果)の2調査間による比較検討を行った。また、調査1、調査2のみで質問した項目についても、それぞれ集計して分析した。

(6) 倫理的配慮

アンケートや研究実施にあたっては、ゼミの担当教員から十分な説明を行い、回答をしたくない場合は、即座に中止してもいいことを伝えるなど、教育的配慮を行った。

3. 結果

(1) めざしている取得資格・免許と職種の状況

対象者32名のうち全員が保育士資格取得をめざし、そのうち保育所保育士が22名(68.8%)、幼稚園教諭が17名(53.1%)と半数以上の学生が保育者・教育者をめざしていた。また、その他にも保育士資格や社会福祉士資格を活かした仕事をめざしているという回答が多かった。

(2) 調査1(中間)と2(ポスター/成果)の比較

フィールドワーク研究の振り返り調査1、2について、①自分のテーマの評価、②事前学習の評価、③研究計画・方法の評価、④報告会の評価、⑤研究や課題へのモチベーションの評価について、それぞれの自己評価の結果を以下に示す。

①テーマに対する自己評価(図1)

自分自身のテーマについて「独創性・独自性がある」回答したのは、中間後(調査1:以下、中間後

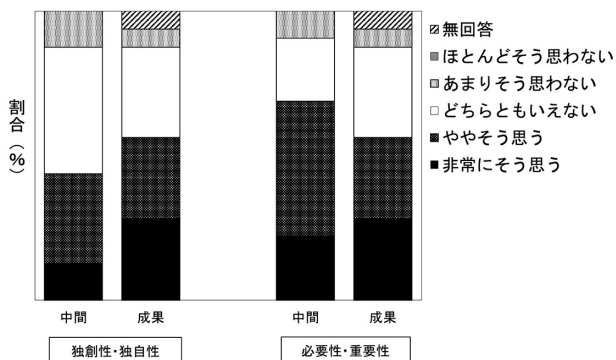


図1 自身の研究テーマの評価

と記す)が14名(43.8%)で、成果後(調査2:以下成果後と記す)が18名(56.3%)で10%増加した。一方、「必要性・重要性がある」と回答したのは、中間後が22名(68.8%)だったが、成果後は18名(56.3%)に減少した。

②事前学習・方法に対する自己評価(図2)

研究に向けて「事前学習をした」と回答したのは、中間後、成果後ともに約6割だったが、「非常にそう思う」と回答した学生が中間後は1名だったが、成果後では7名(21.8%)に増加した。

事前学習の際、「図書館を利用した」学生は、中間後も報告後も約4割以下だった。図書館以外の文献データベースやインターネットの論文検索サイトを使用した学生は約半数おり、図書館利用よりも多かった。

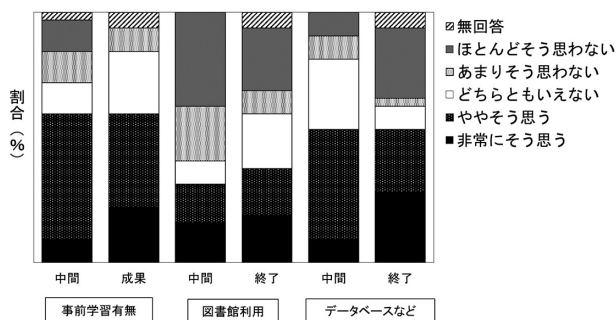


図2 自身の事前学習に対する評価

③研究計画・方法に対する自己評価(図3)

「研究が計画通りに進んでいる/進んでいた」「計画した方法が適切だった」と回答した、学生は約6~7割いた。そのうち「仮説をもって研究に臨んだ」学生は、中間後が15名(46.6%)だったが、成果後には20名(62.5%)に増加した。

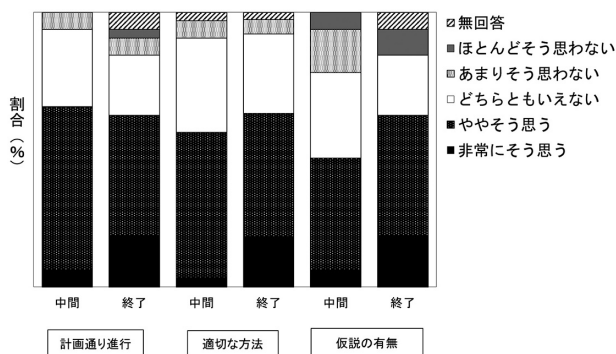


図3 自身の事前計画・方法に対する評価

④報告会に対する自己評価（図4・5）

図4に、発表のための準備と課題に関する評価の結果を示した。中間報告会は約8割、ポスター発表会では約6割が「しっかり準備した」と回答している。研究計画書や発表のためのプレゼンテーションの作成といった発表のための課題は、ほとんどの学生が取り組んでいた。しかし、各報告会までに、研究に関して友人や教員などに相談した学生は、中間後、成果後ともに半数以下だった。特に、中間報告会では、「ほとんど相談していない」と回答した学生が4名（12.5%）いた。

図5に、自分の発表や発表会に対する評価の結果を示した。自分の発表が「うまくいった」と回答したのは、中間後は15名（46.9%）だったが、ポスター発表後では25名（78.1%）とより高かった。また、報告会に対しては、中間報告会もポスター発表会も、「参加してよかった」という回答が、約8割と非常に高かった。

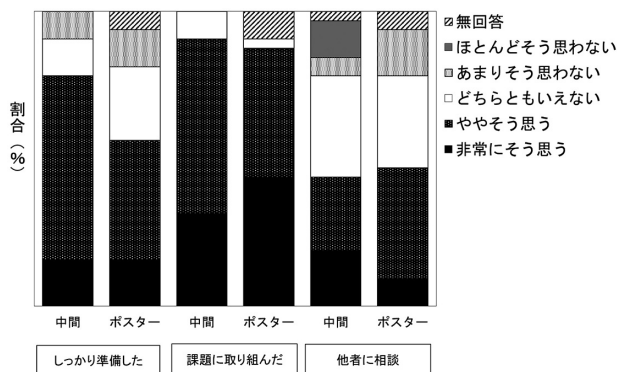


図4 報告会の評価①：発表のための準備と課題

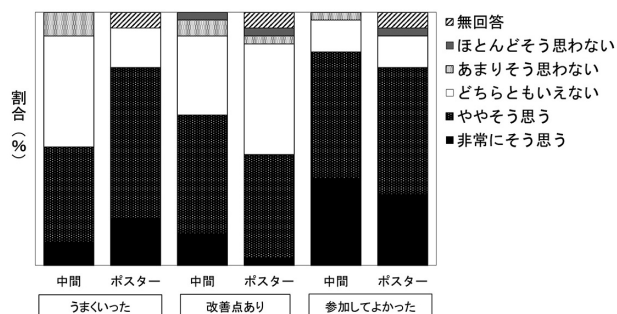


図5 報告会の評価②：発表や発表会の評価

⑤報告会後の評価（図6）

中間報告会およびポスター発表会後のフィールドワーク研究に対する自分の行動や考え方について

は、中間報告会后に、自分の研究の目的や課題が明確になったという学生は23名（71.8%）と多かった。

研究に関して他の人に相談したり、ゼミ内での議論に積極的に参加したりしたと回答した学生は、中間報告会后からポスター発表会后にかけて、3名（9.4%）から16名（50%）と大幅に増加した。

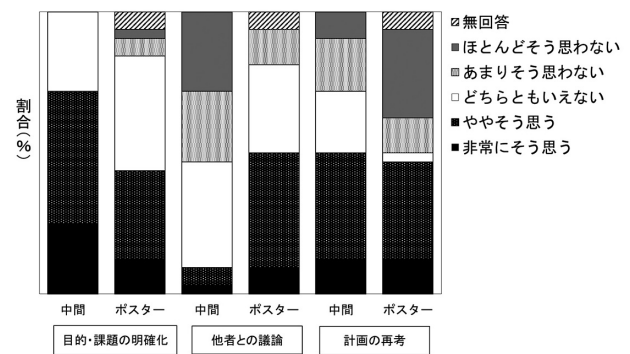


図6 発表後の取組みの評価

⑥研究や次の課題へのモチベーション（図7）

フィールドワーク研究に対する意欲についての評価を求めたところ、「楽しみ（69.8%）/楽しかったか（66.6%）」と回答した学生が約7割、および次の課題に対しての意欲についても、中間後は約7割と高かった。一方、「新しく取り組みたいことができたか」という質問に対しては、中間後、成果後いずれも4名（12.5%）で大変低かった。

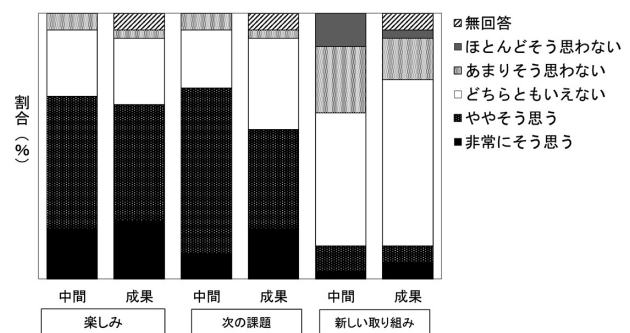


図7 研究や次の課題へのモチベーション

⑦研究全体に対する評価（図8・図9）

フィールドワーク研究を終えて、フィールドワーク（現場への訪問や見学、インタビュー、観察など）の実施状況と、研究プロセスの中で、どのようなことが難しかったかについて回答を求めた。

約7割の学生が保育所や幼稚園、博物館などの現

場に訪問し、専門家や利用者、子どもや保護者対象にインタビューや観察を実施していた(図8)。また、研究プロセスの中で、「他者との議論(50%)」「他の授業や課題との時間調整や配分(43.8%)」「テーマの選定(40.6%)」において難しさを感じていた学生が多かった(図9)。

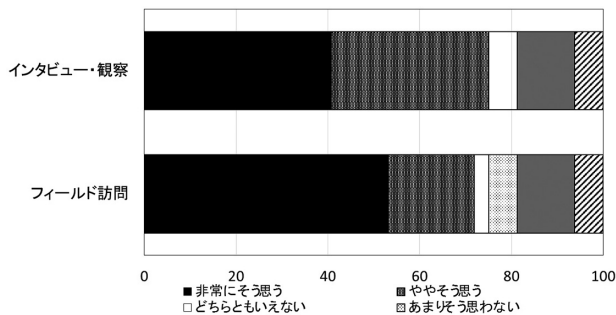


図8 フィールドワークの実施状況

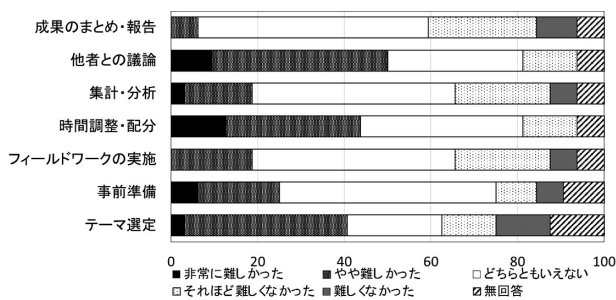


図9 フィールドワーク研究プロセスに対する意識

⑧研究後の取り組みや考え方(図10)

フィールドワーク研究全体を通して、自分の行動や考え方に影響があったかの回答を求めたところ、「他の人の研究に興味や関心がもてた(87.5%)」「自分の苦手なことがわかった(75%)」と回答した学生が多かった。一方、「新しく取り組みたいことができた」「自分の得意なことが分かった」「社会や地域の様々な事象について考えることができた」と回

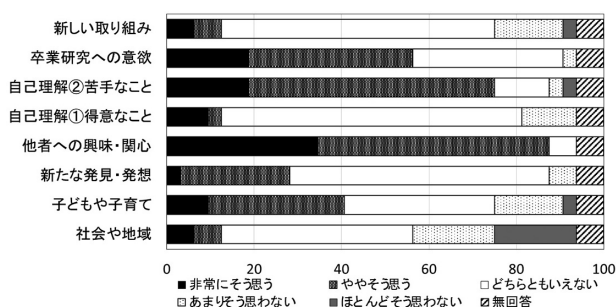


図10 フィールドワーク研究後の意識

答した学生はいずれも4名(12.5%)であり、非常に少なかった。特に、「社会や地域の様々な事象について考えることができた」に対して「ほとんどそう思わない・あまりそう思わない」と回答した学生が12名(37.5%)で、他の項目と比べて多かった。

4. 考察

(1) フィールド研究を通じた学習の主体性と自己決定の意味

本フィールド研究において、多くの学生が活動を高く評価し、学びに対する肯定的な評価をしていた。また準備過程を自分で決定し、計画を遂行しようとする主体的なプロセスを「楽しい」と評価していることは、この学習活動が学生にとっての達成感をうむものであったと言えよう。

(2) 「仲間との共有」による実践の質の向上

本調査の結果から、7割近い学生が本フィールドワーク研究に対して高いモチベーションを維持して取り組んでいたことがわかった。特に、自分の研究を発表する報告会に関連した項目で、高い自己評価と満足度が示された。こうした学習の成果は、「子ども教育学基礎演習ⅡA・B」の学期末課題においても表れ、課題に報告会に必要な資料を含めたことで、課題への取り組み方や提出状況が他の講義科目の課題に比べて非常に良い結果となった。

こうした学習へのモチベーションや積極性が高まったことは、活動自体がアクティブな学びであるといえるが、それとともに、活動内容を「仲間と共有すること」による効果だと考えられる。ことに、中間報告では、事前学習や計画の内容を、単にゼミ担当教員やゼミメンバーに報告するだけでなく、ゼミの枠を超えた他の教員や学生と共有できたことが有効だった。他者との議論によって、自身の研究の目的や課題が明確になり、実際のフィールドワークなど、次のステップへのモチベーションにつながったと考えられる。

(3) 「対人基礎力」の発揮・強化の場

こうしたフィールドワーク研究を通して、研究に関する他者との対話や議論が増え、他の人の研究に興味をもてるようになった学生が多かったことが結

果から示された。このことから、本実践は、対人興味や共感・受容といった「親和力」や、他者と状況を共有し、相談し合うなど相互支援できる「協働力」を発揮し、さらに強化する場になっていたといえる。

保育や教育の専門性を獲得していく過程では、一見、興味・関心がない事象や自分にとって困難な課題にも向き合わなければならない。そうした場面においても、フィールドワーク研究で培ったような、「親和力」や「協働力」などの「対人基礎力」が、困難な状況や課題に向かうための支えとなるだろう。

(4) 地域や他者とかわることによる自己理解

(3)で述べたように、本実践が「対人基礎力」を発揮する機会への支援となっていたと同時に、研究テーマに対する評価や研究後の意識調査の結果から、自己理解を深める場となっていたことが推察された。

研究テーマを選定するプロセスでは、「テーマの選定が難しかった」と感じていた学生が多かったが、自分の研究テーマの独創性や独自性を認めている学生も約半数いた。また、研究後に「自分の苦手なことがわかった」学生が多かったことから、自分自身の興味・関心を探る作業や、それを報告会などで他の学生と共有し、比較することによって、他者と自己の違いや自身の弱点を認めながら、自分のテーマの強みである独創性や独自性を認識することができていくのではないかと考えられる。

しかし、一方でテーマの選定や研究のプロセスにおいては、自分で決定して遂行の方法を定められない場合もあり、そこで担当教員が方向性を示すことも必要であり、その際、学生の特性や問題意識を含め、個別に対応方法を考慮していくことが求められるといえよう。

このように、大学生が社会や他者と交流しながら、自身について探求する取り組みは、「何をしたいかわからない」「何もやりたくない」など、青年期後期特有のモラトリアムやアイデンティティ拡散傾向が強まり、社会や他者との交流を避ける場合も増えていることが指摘されて久しい。こうした状況から脱出し、アイデンティティ確立に向かうきっかけになるために大学教育の中身をより充実させていくことが求められているといえる。

5. 今後の課題

「フィールドワーク研究」実践では、大学生として生きる力を支え、保育や教育の専門性を身につける素地づくりをしながら、「知識及び技術」「思考力、判断力、表現力」「学びに向かう力、人間性」を育成することをめざした。また、その意義や実態を明らかにし、その効果を検討するために振り返りとしての調査をおこなった。その結果、「フィールドワーク研究」実践では、次のようなりテラシーやコンピテンシーの育成としての教育的効果があることが示唆された。

<「フィールドワーク研究」実践で育成できる力> りテラシー

- ① 問題解決力：情報収集力・分析力・課題発見力
コンピテンシー
- ② 対人基礎力：親和力・協働力
- ③ 對自己基礎力：独自性理解
- ④ 対課題基礎力：課題発見力、情報実践力、実践力

しかし、学生のなかには、計画はしていたものの、実際には十分なフィールドワークが実施できなかった学生や、自己の意思や判断において自ら進んで行動すること（主体的行動）が難しい学生、課題を完遂するための行動持続力の乏しい学生もおり、学生個々の特性に合わせたサポートや工夫が求められる。また、意欲があっても他の授業の課題との調整や時間配分が難かったという意見があり、他の科目や授業との連携も検討する必要がある。

今後は、「大学2年生」という青年期の発達上の特性や学年や個人の特性も考慮しながら、次のステージに向かうモチベーションを向上できる機会となるよう工夫し、新たな実践を検討したい。

引用文献

- 菅井洋子・箕輪潤子・草信和世・近藤千草・葉山登・内海崎貴子 (2012). 川村学園女子大学研究紀要23, 15-29

- 厚生労働省 (2017). 保育所保育指針 フレーベル館 10-12.
- 竹ノ下祐二・水野友有・柴崎直人・江崎榮彦・古田保 (2013). 2013年度各務原フィールドワークによる地域子ども学研究報告書. 中部学院大学子ども学部子ども学科.
- 服部次郎 (2013). 保育者・教師養成課程における初年次教育としての施設(学校)見学を充実させる事前・事後学習の実践のその後の専門教科への影響について 椋山女学園大学教育学部紀要 6, 283-307.
- 服部次郎 (2015). 保育者・教師養成課程における初年次教育としての施設(学校)見学を充実させる事前・事後学習の実践 椋山女学園大学教育学部 紀要 8, 179-192.
- 藤野哲也 (2006). 初年次教育の目的と実際 リメディアル教育研究 1, 1-9.
- 文部科学省 (2017). 幼稚園教育要領 フレーベル館 5-9